

日本語版成人アタッチメント尺度 AAQ の妥当性と カップル間葛藤との関連性について

Validity of the Japanese version of the AAQ adult attachment scale and the relationship between
AAQ scores and conflict in couples

岡本吉生*

Yoshio OKAMOTO

抄 録 Simpson ら (1996) が開発した成人アタッチメント尺度 AAQ の日本語版を作成し、その妥当性を検討し、AAQ とカップル間葛藤のコミュニケーション・パターンや対処行動との関連性を探った。女子大学生 243 名の回答から、日本語版 AAQ には「親密性回避」「愛情不安」「密着欲求」「見捨てられ不安」の 4 因子構造が認められた。「親密性回避」は 1 因子として独立していたが、残る 3 因子は相互に相関があり、それらを包括して「関係不安」とした。日本語版 RQ との比較から AAQ に併存的妥当性が認められた。愛情不安が高いほど、異性との葛藤のさいに対立的態度や問題取組という解決行動を敬遠することが明らかとなった。

キーワード：カップル間葛藤、コミュニケーション・パターン、対処行動、成人アタッチメント、AAQ

Abstract The purposes of this study were (1) to develop a Japanese version of the Adult Attachment Questionnaire (AAQ), developed by Simpson et.al. (1996) and to examine its validity and (2) to explore the relationship between communication patterns/coping behaviors and attachment styles in couples. Responses from 243 undergraduate female respondents indicated that the Japanese version of the AAQ (AAQ-J) consisted of four factors, “Intimacy avoidance,” “Emotional anxiety,” “Desire for attachment,” and “Abandonment anxiety.” Intimacy avoidance was an independent factor while the other three factors correlated with one another. Those three factors were encompassed by “Relationship anxiety.” Concurrent validity of the AAQ-J was verified by compared it with the Relationships Questionnaire (RQ). Results suggested that a high level of Emotional anxiety hindered coping strategies such as “opposition” and “problem-solving” in conflict among couples.

Key words : Conflict among couples, Communication pattern, Coping behavior, Adult attachment, AAQ

問題と目的

近年、カップル間での葛藤が発端となり、関係解消を迫られた相手がかつての恋人につきまとい等のストーカー行為をしたり、自分たちだけでは話し合いによる適切な関係の清算が困難になって、身体的

な危害を加えるなどの重大事件にまで発展する事案がしばしば報道されている。2018 年の警察庁の統計によると、ストーカー行為の全件数 21,000 件のうち 9,323 件 (43.3%) が元交際相手によるものであり、若者の恋愛葛藤は社会問題となっている。

カップル間の葛藤要因には、双方のコミュニケーション能力、葛藤解決能力、衝動性のコントロール、相手の心情の読み取り、葛藤への気づきなど多様なものが含まれる。一般に、葛藤は人に不快感を与え

* 児童学科
Department of child studies

るストレス要因であり、葛藤に直面することは人の精神的安定を損なう脅威となる。とはいえ、葛藤が人に脅威となるかどうかは、葛藤の種類と大きさや相手とのやり取りの中でのコミュニケーションのあり方のほかに、個人の特質によっても異なると考えられる。

夫婦やカップルの葛藤を研究し臨床に活かした Gottman, J. (1994, 1999) は、関係破綻となるまでの高リスクなやり取りには非難、軽蔑、言い訳、逃避という4つのメッセージが含まれるという^{1) 2)}。また、岡本 (1999) は、離婚の危機に直面した夫婦の言語的メッセージの分析したところ、カウンセリング時のメッセージの種類(サポートや回避等)がその後の結果(同居・別居・離婚)を左右することを明らかにしている³⁾。岩藤 (2008) は、関係不安によってなだめ、対立、問題取組、没交渉という4つの対処行動が選択されることを検討している⁴⁾。

個人の特質についても、葛藤を危機とみなすかどうかは人の葛藤に対する評価によって異なると考えられる。確かに、実際には危機的とは言えない状況を過大に評価する人がいれば、何もなかったように過小評価する人もいる。そのいずれも夫婦間葛藤では問題になると家族療法家は指摘している⁵⁾。つまり、前者の場合は、自分が相手との関係に少しでも問題が生じないように常に警戒を怠らない問題に敏感な態度であり、この場合は些細なことを問題視しやすく葛藤を引き起こしやすい。逆に、後者の場合は葛藤があることを無視して気づかないふりをする態度であり、葛藤に対する解決が遅くなり葛藤を感じている相手の不満を引き起こしやすい。

このような脅威に対する異なった2つの態度を、

Bowlby (1969, 1973, 1988a) は、葛藤という脅威に対する過敏な態度は自己の不安へのとらわれであり、逆に明らかな脅威を無視してしまう態度は自己の自律性が奪われる親密性の回避であると考え、いずれも親密な他者との近接性 (proximity) に関する問題であると説き、アタッチメント理論を提唱した^{6) 7) 8)}。

Hazan and Shaver (1987) は、アタッチメントは親密な関係にある者の中で更新されながら一生続くものとの Bowlby (1988b) の考え⁹⁾ にヒントを得て、夫婦や恋愛関係の質にアタッチメントが重要な役割を果たすという成人アタッチメントの概念を提起した¹⁰⁾。成人アタッチメント・スタイルは、当初、3タイプになるとの考えが中心だったが、Bartholomew and Horowitz (1991) は¹¹⁾、Bowlby の理論に自己の不安へのとらわれ(見捨てられ不安)という自己モデルと親密性回避の2軸から4つのアタッチメント・スタイルが想定されると主張した (Table 1)。成人アタッチメント・スタイルの測定に自己報告式が用いられる場合、最近ではこの2軸4分類が採用することが一般的であることから、本研究でもこの分類方法を用いることにする。

欧米におけるこれまでの研究によると、カップル間葛藤とアタッチメント・スタイルとに密接な関係があることが明らかとなっている。例えば、安定型の人には建設的に振る舞い、その建設的な相互作用が親密性をさらに発展させるが、見捨てられ不安の高いとらわれ型の人にはアタッチメントシステムが常に活性化されて(過活性)、葛藤に否定的な情動や認知が喚起されやすい。また、親密性に回避的な拒絶型の人には葛藤場面に置かれることで自らの独立性が脅かされると捉えやすいなどの報告がある^{13) 14)}。恐れ型

Table 1 Classification of attachment styles based on a combination of the self model and other model

		自己モデル (見捨てられ不安)	
		ポジティブ (低い)	ネガティブ (高い)
他者モデル (親密性回避)	ポジティブ (低い)	安定型(secure) 親密性と自律性のある ことが心地よい	とらわれ型(preoccupied) 明らかに他者依存的
	ネガティブ (高い)	拒絶型(dismissing) アタッチメントを否定 対抗依存	恐れ型 (fearful) アタッチメントへの恐れ があり、社会的回避傾向

Feeney (2008) を参考に作成した¹²⁾

の人についての研究は多くないが、葛藤場面で見捨てられ不安と親密性回避の両方が同時に喚起されることから、虐待された経験のある子どものように、アタッチメント対象との近接性が不安定で、突然近づいてきたり不意に離れたりという予測不能な行動を示しやすいと言われている¹⁵⁾。日本では、成人アタッチメント・スタイルとカップル関係における否定感情を検討した研究があるが¹⁶⁾、カップル間葛藤との関係を取り上げたものは見当たらない。

また、成人アタッチメント・スタイルの測定については、面接によって人生早期のエピソードを詳細に回想して明らかにする Main, Hesse, and Goldwyn (2008) の AAI (adult attachment interview) がよく知られているが¹⁷⁾、AAI は面接のための熟練が必要である。そのため、特に社会心理学の分野では自己報告による測定が中心のようである。中尾・加藤 (2004) は、成人愛着スタイル尺度 (Experiences in Close Relationship; ECR) の日本語版の妥当性を記述式質問紙である RQ (Relationship Questionnaire) の結果から検証している¹⁸⁾。ただし、日本語版 ECR は 26 項目からなっており、他の質問項目を組み合わせると被検者に負担を感じさせるとの懸念がある。

そこで本研究では、J. A. Simpson, W. S. Rholes, & D. Phillips (1996) が開発した¹⁹⁾、全 17 項目からなる AAQ (Adult Attachment Questionnaire) を取り上げ、その日本語版の作成を試みるとともに、同尺度の妥当性を検討することを第 1 の目的とする。AAQ では、自己モデルをアタッチメント不安、他者モデルを回避的アタッチメントと呼び、両者の組み合わせによって 4 つのアタッチメント・スタイルに分類することも可能である。そして、日本語版 AAQ で測定された成人アタッチメント・スタイルがカップル間葛藤におけるコミュニケーション・パターンや対処行動とどのように関連するのかを探索することを第 2 の目的とする。

方法

対象：個人を特定しないこと、結果はすべて統計的に処理することを伝え、協力の得られた女子大学生 250 名を対象とした。実施は、2014 年 4 月から 2018 年 4 月の間の 4 回である。極端に年齢が異なるものや明らかに不完全と判断されるものを除いた 243 名 (平均年齢 19.45、標準偏差 .70) の回答を採用した。

質問紙：質問紙は、年齢、性別の基礎項目、AAQ (17 項目) 及び併存的妥当性の測定具として RQ (4 種類の文章に対する評価と 1 強制選択枝)、カップル関係にリスクとなる非難・軽蔑・言い訳・逃避 (回避) の 4 種類の葛藤のコミュニケーション・パターン (4 項目)、なだめ・対立・問題取組・没交渉の 4 種類の葛藤対処行動 (8 項目) からなる。すべての項目で 7 件法 (1 = 「全く違う」から 7 = 「全くそう」、または「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」) を採用した。

AAQ の日本語版の作成：J. A. Simpson ら (1996) による AAQ を、筆者ができるだけ忠実に日本語に訳した後、翻訳資格を持つ日本人が原語のニュアンスが通じるよう用語のチェックを行い、文章を修正した。RQ については、中尾ら (2004) が ECR の妥当性を検討する際に用いた RQ の日本語版を用いた²⁰⁾。

結果

(1) 日本語版 AAQ 尺度

AAQ の 17 項目について主因子法による因子分析を行った。固有値は第 1 因子から順に 3.07, 2.30, 1.73, 1.46, 1.04 と推移していったため 4 因子解であると仮定して、再度主因子法により 4 因子を抽出し、プロマックス回転を行った。解釈が可能であることと因子負荷量が .40 以上の基準によって行った結果、最終的には Table 2 のように 13 項目が残った。4 因子での累積説明率は 63.4%であった。

第 1 因子を「親密性回避」、第 2 因子を「愛情不安」、第 3 因子を「密着欲求」、第 4 因子を「見捨てられ不安」と命名した。各因子を構成するそれぞれの尺度項目値から信頼係数を算出したところ、第 1 因子から第 4 因子までのそれぞれの α 係数は、.69, .75, .63, .70 であり、比較的高い信頼性が得られた。

その後、各因子の尺度得点を算出した。因子の意味も踏まえ、第 2 因子の項目 17 と項目 12、第 4 因子の項目 4 と項目 16 を逆転項目とした。因子間の相関は、Table 3 のとおりであり、「親密性回避」は他の 3 因子と相関が認められなかったが、「見捨てられ不安」は「愛情不安」及び「密着欲求」と高い相関が認められた。「愛情不安」と「密着欲求」も弱い相関が認められた。また、第 2、第 3、第 4 因子に相互の相関のあること、Simpson ら (1996) はこれら 3 因子をアンビバレンスとして 1 因子とみなし

Table 2 Factor analysis of the AAQ (Japanese version) (N=243)

		F1	F2	F3	F4
		$\alpha = .69$	$\alpha = .75$	$\alpha = .63$	$\alpha = .70$
6	私は、人と親しくなりすぎると、少し落ち着かない。	.81	.05	.06	-.03
5	私に近付きすぎる人を好きではない。	.66	-.15	-.14	.12
8	私は、誰かが近づいてくるといつでも緊張する。	.48	.04	.13	-.13
9	私が心地よい状態よりも、人はもっと私と親密になりたがるが多い。	.47	.14	-.04	-.07
11	パートナーは私をあまり愛していないのではないかと、よく心配になる。	-.07	-.86	.01	-.02
17	私がパートナーを愛しているのと同じくらい、パートナーも私を愛していると確信している。	-.03	.65	-.04	-.11
12	パートナーが私から離れていくのではないかと心配することなど、めったにない。	.04	.58	.02	.22
13	私は、他の人たちに完全に溶け込みたいとよく思うが、その考えがときどき人を怖がらせ、遠ざける。	.04	-.01	.63	.03
10	私が望むほどには、人は私と親密になりたがらないことが多い。	.14	-.12	.63	.06
15	私はたいてい、人が望むよりも、もっと親密で深い関係になりたい。	-.19	.08	.59	-.06
4	人に見捨てられるのではないかと心配することなど、めったにない。	-.02	.02	.04	.82
16	人においていかれている、という考えが頭をかすめることは、めったにない。	-.07	.01	-.01	.65
因子間相関		F1	F2	F3	
F1					
F2		-.10			
F3		.03	-.18		
F4		-.03	.43	-.37	

Table 3 Coefficients of correlation between subfactors of the AAQ

	親密性回避	愛情不安	密着欲求
愛情不安	.04		
密着欲求	.02	.16*	
見捨てられ不安	.09	.37**	.24**

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 4 Mean and SD of AAQ scores

	親密性回避	愛情不安	密着欲求	見捨てられ不安	関係不安
平均値	3.05	4.02	3.14	4.86	4.01
標準偏差	1.11	1.28	1.04	1.40	.89

ていることから、本稿では「愛情不安」「密着欲求」「見捨てられ不安」をまとめて「関係不安」と呼ぶことにする。それぞれの尺度得点の概要は Table 4 のとおりである。尺度得点を見ると、「親密性回避」に比べ、「関係不安」に含まれる「愛情不安」と「見捨てられ不安」の得点が高かった。

(2) 日本語版 AAQ 尺度と RQ との関連性

次に、AAQ が RQ によるアタッチメント・スタイルとどれくらい同一性があるのかを確認した。RQ は Bartholomew and Horowitz (1991) がアタッチメントに 4 つのスタイル (安定型, とらわれ型, 恐れ型, 拒絶型) があることを確認するために用いた質問紙である。RQ では、回答者にそれぞれのスタイルがどれくらいあるかを自己評価させ、最後に自分がどのタイプかを選択させる強制法によって測定する。4 つのスタイルの程度は、自己観と他者観の 2 つの軸に変換することができる (J. A. Simpson et al., 1996; 中尾達馬, 2012) が、自己観がアンビバレス (本稿では「関係不安」と呼んでいる) の程度が低いことを意味し、他者観が親密性回避の程度が低いことを意味することから、ここでは次のような方程式で RQ の尺度値を変換した。それぞれの得点は Table 5 のとおりである。AAQ 得点と同様に、RQ 得点についても、親密性回避に比べて、関係不安得点が高かった。

$$\begin{aligned} \text{RQ の関係不安得点} &= (\text{とらわれ型得点} + \text{恐れ型得点}) - (\text{安定型得点} + \text{拒絶型得点}) \\ \text{RQ の親密性回避得点} &= (\text{拒絶型得点} + \text{恐れ型得点}) - (\text{安定型得点} + \text{とらわれ型得点}) \end{aligned}$$

AAQ による得点と RQ による得点の相関は Table 6 のとおりである。RQ によって測定された関係不安得点は、AAQ によって測定された愛情不安得点、密着欲求得点、見捨てられ不安得点、さらには関係不安得点と強い相関があり、親密性回避得点とも弱い相関があった。また、RQ によって測定された親密性回避得点は、AAQ によって測定された親密性回避得点及び密着欲求得点と強い相関をもち、愛情不安、見捨てられ不安、関係不安とは相関がみられなかった。

次に、RQ によって選択されたアタッチメント・タイプごとの AAQ の下位因子得点 (及び関係不安得点) の平均値に差があるかどうかを一元配置による分散分析、Tukey の HSD 法による多重比較により検定した (Table 7)。親密性回避については、拒絶型と恐れ型が安定型ととらわれ型よりも有意に大きな値であった。愛情不安、見捨てられ不安、そして関係不安については、とらわれ型と恐れ型が安定型と拒絶型よりも有意に大きな値となった。ただし、密着欲求については、とらわれ型が他のタイプよりも有意に高い値となった。安定型はいずれの AAQ の値で低かった。

Table 5 Mean and SD of scores on two axes of the RQ

	RQ による 関係不安	RQ による 親密性回避	最小値	最大値
平均値	1.51	-1.43	-10	11
標準偏差	4.02	3.03	-9	7

Table 6 Coefficients of correlation between AAQ and RQ scores

		AAQ				
		親密性回避	愛情不安	密着欲求	見捨てられ不安	関係不安
RQ	関係不安	.15*	.36**	.41**	.56**	.62**
	親密性回避	.43**	.05	-.21**	.03	-.04

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7 Mean and SD of AAQ subscores for each attachment style on the RQ (provisional)

RQ	親密性 回避	愛情不安	密着欲求	見捨てられ 不安	関係不安
安定型	2.70 (1.04)	3.59 (1.25)	2.80 (.94)	4.12 (1.37)	3.50 (.84)
拒絶型	3.75 (1.18)	3.69 (1.29)	2.71 (.88)	3.79 (1.60)	3.40 (.92)
とらわれ型	2.87 (.91)	4.33 (1.24)	3.70 (1.04)	5.40 (1.21)	4.48 (.76)
恐れ型	3.68 (1.16)	4.21 (1.28)	2.85 (.83)	5.33 (.98)	4.13 (.66)
	拒絶型, 恐 れ型>安定 型, とらわ れ型	とらわれ型, 恐れ型>安定 型, 拒絶型	とらわれ型> 安定型, 拒絶 型, 恐れ型	とらわれ型, 恐れ型>安定 型, 拒絶型	とらわれ型, 恐れ型>安定 型, 拒絶型

表中の “>” は, * p<.05.を表す

(3) カップル間葛藤とアタッチメント・スタイル

関係へのリスクが高いとされるコミュニケーション行動については, 他の行動に比べて「非難」が低い値となった (Table 8)。また, 葛藤に対する対処行動については対応する2項目の平均をとって算出した (Table 9)。問題取組が他の行動よりも高い値となった。

Table 8 Mean and SD for four communication patterns

	非難	軽蔑	言い訳	逃避
平均値	2.81	3.41	3.68	3.96
標準偏差	1.56	1.64	1.62	1.93

Table 9 Mean and SD for coping behaviors

	なだめ	対立	問題 取組	没交渉
平均値	3.98	3.60	4.57	3.89
標準偏差	1.41	1.47	1.15	1.56

葛藤時のコミュニケーション・パターンがどのような対処行動に影響するのかを明らかにするために, 葛藤時のコミュニケーション行動を独立変数に, 対処行動を従属変数とする重回帰分析を行ったところ, 「言い訳」から「なだめ」に対する標準偏回帰係数 (β) が有意であった。また「逃避」は, 「問題取組」に有意に負の標準偏回帰係数を示すとともに, 「没交渉」に有意に正の標準偏回帰係数を示した (Table 10)。

次に, AAQによって測定されたアタッチメント・スタイルが葛藤時のコミュニケーション・パターンや対処行動にどのように影響するかを明らかにするため, AAQによる各因子得点を独立変数とし, 葛藤時のコミュニケーション行動及び対処行動を従属変数とする重回帰分析を行ったところ, 「愛情不安」が「対立」と「問題取組」に有意の負の標準回帰係数を示した (Table 11)。

考察

Simpson ら (1996) が開発した成人アタッチメント尺度の日本語版 AAQ は 13 項目 4 因子構造とするのが相当と考えられた。日本語版 AAQ の第 1 因子「親密性回避」は Simpson らの回避的アタッチメントに対応し, 日本語版 AAQ の第 2 因子「愛情不安」, 第 3 因子「密着欲求」, 第 4 因子「見捨てられ不安」を合わせた「関係不安」は Simpson らのアタッチメント不安に対応していた。妥当性の確認されている日本語版 RQ との併存的妥当性の検討では, ほぼ一貫した結果が得られ, 全般には妥当性が検証されたと判断される。

ただし, 日本語版 AAQ の下位因子の一つである密着欲求は日本語版 RQ によって測定される「親密性回避」と負の有意な相関があり, 日本語版 AAQ には他者との親密な関係を回避する他者モデルの概念がやや混在している可能性が示唆された。確かに, 密着欲求で測定されている概念には, 人とピタッとくっついて離れないことが問われており, そこには親密な他者と離れてしまうことへの不安だけでなく「他者と離れている」という対人距離に関する概念

Table 10 “Soothing,” “Problem-solving,” and “Isolation” behaviors affected by conflictual communication patterns

	B	SEB	β	B	SEB	B	B	SEB	β
非難	.00	.07	.00	.05	.06	.06	-.04	.07	-.04
軽蔑	.11	.06	.13	.05	.05	.06	-.05	.06	-.05
言い訳	.19	.06	.22***	-.05	.05	-.07	-.01	.06	-.01
逃避	.02	.05	.03	-.08	.04	-.14*	.37	.05	.46***
基準変数：なだめ				基準変数：問題取組			基準変数：没交渉		

* $p < .05$, *** $p < .001$

Table 11 “Opposition” and “Problem-solving” behaviors affected by AAQ subscores

	B	SEB	β	B	SEB	β
親密性回避	-.05	.09	-.04	.07	.07	.06
愛情不安	-.30	.13	-.26*	-.26	.10	-.29**
密着欲求	-.07	.13	-.05	-.15	.10	-.13
関係不安	.15	.22	.09	.07	.17	.06
基準変数：対立				基準変数：問題取組		

* $p < .05$, ** $p < .01$

も含まれるためであろうと考えられる。この点は、よりの確にアタッチメント不安を表すための修正が必要かもしれない。

また、日本語版 AAQ で測定される個人のアタッチメント・スタイルとカップル間葛藤の際のコミュニケーション・パターンや葛藤時の対処行動との関連性を検討したところ、親密な他者である異性（男性）に対して、関係不安のひとつである愛情不安が高い者ほど、相手と対立関係になるような直接的・直截なコミュニケーションを控え、それがカップル間葛藤への対処行動と考えていることがわかった。同様に、愛情不安の高い者ほど、交際相手に対して問題点を指摘して葛藤を解決したり、何らかの解決策を示したりするような対処行動も敬遠する傾向にあることが明らかとなった。言い換えると、自分が相手から愛されるだけの価値のある存在であるとは思えない者ほど、カップル間で生じる意見の不一致や喧嘩等の場面に身を置いて何とか関わろうとしながらも、葛藤場面に圧倒されて戸惑い、直接的あるいは主体的に解決行動をとらない傾向が予想される。いわば、カップル間葛藤の場面で逡巡する様子が出た。

なお、カップル関係を破綻へと導きやすい葛藤的なコミュニケーション・パターンと対処行動との分析から、言い訳が多く自己防衛的な態度をとる者は、葛藤が起こるとなだめて葛藤のエスカレーションを抑えようとする者、逃避的なコミュニケーション・パターンをとる者は、問題への取り組みに消極的で相手とコミットしない傾向が認められた。これらの関連性は個人のアタッチメント・スタイルとは直接的な関係にないことから、個人に内在化しているアタッチメント・パターンという個人の特性の問題というよりも、カップル間葛藤という状況の中でどの人間も共通に示す行動パターンであると示唆された。

今回検討した日本語版 AAQ は青年期の女性が対象であるため、男性のデータによる検討が必要である。また、異性との交際の経験が成人アタッチメント・スタイルの修正に寄与する可能性も高く、今後は、これらの点を考慮した研究が求められる。

引用文献

- 1) Gottman, J.: *Why marriages succeed or fail: What you can learn from the breakthrough research to*

- make your marriage last*. New York: Simon & Shuster (1994)
- 2) Gottman, J., & Silver, N.: *Seven Principles for making marriage work*. New York: Crown Publishers (1999) (松浦秀明訳, 「結婚生活を成功させる七つの原則」第三文明社, 2007)
- 3) 岡本吉生: 言語的メッセージの評定基準マニュアルの作成: 夫婦カウンセリングにおける交互発言式合同面接の測定具として. *埼玉県立大学紀要* 1, 29-36 (1999)
- 4) 岩藤裕美: 葛藤生起場面における夫婦間コミュニケーション・スタイル: 尺度の作成と妥当性の検討. *人間文化創成科学論叢*, 11, 183-193 (2008).
- 5) Watzlawick, P., Weakland, J. H., & Fisch, R.: *Change*. New York: W.W.Norton & Company (1974). (長谷川啓三訳「変化の原理: 問題の形成と解決」, 法政大学出版局, 1992)
- 6) Bowlby, J.: *Attachment and Loss* (Vol. 1). New York: Basic Books (1969)
- 7) Bowlby, J.: *Attachment and Loss: Anxiety and Anger* (Vol. 2). London: Tavistock Institute of Human Relations (1973)
- 8) Bowlby, J.: *A Secure Base*: Tavistock/ Routledge (1988a)
- 9) Bowlby, J.: *A secure base: clinical applications of attachment theory*. New York: Routledge (1988b) (二木武監訳「母と子のアタッチメント: 心の安全基地」医歯薬出版, 1993)
- 10) Hazan, C., & Shaver, P.: Romantic Love Conceptualized as an Attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(3), 511-524 (1987).
- 11) Bartholomew, K., & Horowitz, L. M.: Attachment Styles Among Adults: A Test of a Four-Category Model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61(2), 226-244 (1991)
- 12) Feeney, J. A.: Adult Romantic Attachment: Developments in the Study of Couple Relationships. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment: Theory, Research, and Clinical Applications*, 2nd ed. 456-481, New York: Guilford Press (2008)
- 13) Cambell, L., Simpson, J. A., Boldry, J., & Kashy, D.: Perceptions of Conflict and Support in Romantic Relationships: The Role of Attachment Anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88(3), 510-531 (2005)
- 14) Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (Eds.) *Adult Attachment: Theory, research, and Clinical Implication*. New York The Guilford Press (2004)
- 15) Mikulincer, M., & Shaver, P.: *Attachment in Adulthood: Structure, Dynamics, and Change*. New York: The Guilford Press (2007)
- 16) 金政裕司: 中年期の夫婦関係において成人の愛着スタイルが関係内での感情経験ならびに関係への評価に及ぼす影響. *パーソナリティ研究* 19(2), 134-145 (2010)
- 17) Main, M., Hesse, E., & Goldwyn, R.: Studing differences in language usage in recounting attachment history In H. Steele & M. Steele (Eds.), *Clinical applications of Adult Attachment Interview*. New York: Guilford Press (2008)
- 18) 中尾達馬・加藤和生: 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. *心理学研究* 75(2), 154-159 (2004)
- 19) Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Phillips, D.: Conflict in Close Relationships: An Attachment perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71(5), 899-914 (1996)
- 20) 中尾達馬: *成人のアタッチメント: 愛着スタイルと行動パターン*: ナカニシヤ出版 (2012).